発掘調査の概要

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第150次）

1981年から本格的に始まった石神遺跡の発掘は、前回の19回目の調査（飛鳥藤原第145次調査）において、ようやく阿倍山田道を確認しました。これによって石神遺跡南限から始まり、ひたすら北進を続けてきた長旅に一区切りがつきました。

過去の調査成果を振り返ると、2000年度、2001年度の調査では、石神遺跡の建物群の北限となる、東西方向に走る塀の柱穴列と石組溝を確認しています。今回の調査は、将来の石神遺跡の史跡指定を念頭に、この建物群の北限が東側へどのように延びていくのかを明らかにすることを目的としています。10月１日、今度は東へ向かう旅路が始まりました。

今回の調査区の面積は約400㎡、田んぼ２枚の中で東西に細長く、２区画（西区と東区）に分かれて発掘します。スタートとなる西区西側では、想定していた柱穴列と石組溝が早速顔をのぞかせ始めました。しかし、同時に石神の名にふさわしく、無数の小石や人頭大の石が一面に現れ、我々を悩ませています。微妙に斜行する石列や蛇行する石列もあり、どうやら想定外の石組溝がありそうです。

一方、東区ではすんなりと東西に横切る柱穴列が確認できました。しかし、想定北限ラインから北に約１mずれているのです。こちらも簡単には東進してくれません。

北限の遺構がどのように東へ続くのか、多くの石組溝には何が沈んでいるのか、悩みも楽しみも多く待っていそうです。

（都城発掘調査部　黒坂 貴裕）

斜行石組溝の発掘状況（南東から）

横大路南側溝の調査（飛鳥藤原第149－5次）

横大路は難波から藤原京、さらに東国へとつながる古代の東西幹線道路です。横大路は現代の道路と重なる部分が多いため、その発掘事例はまだ数例しかありません。今回の調査地は藤原京右京一条五坊にあたり、近鉄大和八木駅のすぐ南です。大和信用金庫八木支店の移転工事に伴うもので、北側に東西12m×南北９m、その南に東西4.5m×南北26mの調査区を設定しました。約70m西の奈良地方法務局建設の調査でも横大路南側溝を確認しており、その続きが期待されました。

調査を進めていくと、調査区北側で横大路南側溝を約10m分確認しました。ここから北が横大路ですが、後世の削平が激しいため、路面の様子はわかりません。調査でわかった重要な点は、横大路南側溝が２条存在することです。南側の溝は幅３m、深さ40cmで、北側の溝が幅1.5m、深さ20cmでした。遺構の重複関係と出土遺物の状況から、南側の溝が藤原宮期にあたり、北側の溝がそれよりも新しい藤原宮期末～奈良時代と判断されます。南側の溝からは、木片や土器片などが多数出土しており、墨書土器や硯、馬の歯も見つかりました。

南側溝のすぐ南には２条の細い溝がありますが、その南方には空閑地が広がっており、調査区南端で東西３間・南北２間以上の建物を検出しました。

今回の調査では、横大路南側溝を付け替えた可能性がある、という非常に大きな発見があり、坪内の状況についても手がかりが得られました。今後の調査・研究により、横大路とその周辺のさらなる解明が期待されます。

（都城発掘調査部　番　光）

横大路南側溝（西から）

平城宮跡東院地区中枢部の調査（平城第421次）

平城宮の東には南北750m、東西250mの張り出し部があり、その南半部（南北350m）を東院地区と呼んでいます。都城発掘調査部（平城地区）では、2006年度から東院地区の継続的な調査をおこなっており、今回、その中枢部にはじめて発掘調査のメスをいれました。調査は４月２日から開始し、10月10日に終了しました。

調査の結果、少なくとも５時期以上に区分される遺構の変遷を明らかにしました。

奈良時代前半の遺構は、少なくとも２時期以上確認しました。そのうち古い時期の遺構として、２条の南北塀があります。西側の塀列は、東院西半部の区画の東を限る掘立柱塀で、調査区南端で礎石建ちの門に取り付いています。

奈良時代前半のうち新しい時期の遺構として、９間×４間の四面庇の東西棟建物があります。この建物の柱穴は規模が大きく、１辺1.5m～２m、深さ約1.5mもあります（右上写真参照）。さらに、調査区南端の東西棟建物は、北面に庇をもつ少なくとも東西11間（南は調査区外で未検出）の建物と推定されることから、この時期には何度かの建て替えがあったと考えられます。

奈良時代後半の遺構は、３時期確認しました。なかでも、今回の調査で最も注目される成果は、東院地区の中枢部分（内郭）を囲う回廊を検出したことです。今回検出した回廊は、その西南隅にあたります。

第421次調査区全景（西から）

巨大な柱穴跡

回廊は、最も格式の高い区画施設で、平城宮内で確認された事例は、内裏とその周辺・大極殿院に限られています。また、平城京内の検出例は、寺院の伽藍を除くと、現在のところ数例にとどまっています。東院地区が、きわめて重要な区画と認識されていたことは、このことからも明らかでしょう。

最後の段階の遺構として、東院南門（建部門）の中心を通り、東院を東西に区分する中軸線上に位置する東西棟建物を確認しました。西隣の第401次調査（2006年）でも、同じ時期の南北棟建物が確認されており、この時期の建物は、東院南門の中軸線上に対し、東西対称に配置されていたと推測されます。これらの知見からすれば、奈良時代後半には、東院の中心建物は今回の調査区の北東ないし北方に展開したことはほぼ確実といえます。

このように、今回の調査成果は、東院地区の大まかな時期変遷が明らかにできたこと、中心的な建物の位置を推定する手がかりを得たこと、以上２点にまとめられます。

文献史料によると、東院には「玉殿（ぎょくでん）」と称する建物が建てられており、奈良時代末の楊梅宮（ようばいきゅう）には「安殿（あんでん）」「閤門（こうもん）」などの施設が存在していました。これまでのところ、文献史料にみえる宮やその施設と発掘遺構とを直接結びつける手がかりにはめぐまれませんが、今後の継続した調査により、東院を構成した建物群やその中心施設の発見が期待されます。

なお、本年10月からは、第421次調査区の北東で、引き続き発掘調査をおこなっています。その成果にもご期待下さい。

（都城発掘調査部　山本 崇）

南都大きな？？？

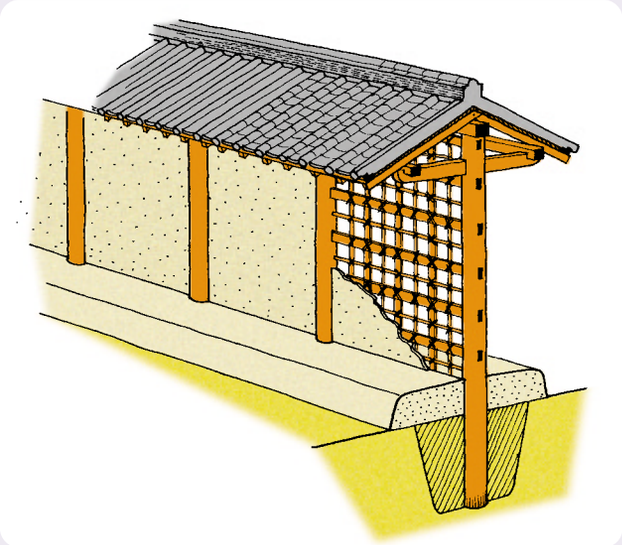
これは、1998年に平城宮跡第一次大極殿院の南西隅（平城第296次調査）から出土した木樋（もくひ）です。全長7m50cm・直径40cmの大木（コウヤマキ）を刳（く）り抜いた暗渠（あんきょ）、つまり地中に埋められた排水溝です。

よく見てみると、方形の穴が随所にあり、それを小さな埋木（うめき）で塞いでいることに気が付きます。このような穴が開いていると、水が漏れて流れなくなってしまいます。それではなぜ、木樋にこのような穴が開いているのでしょうか。これらの穴は等間隔にまっすぐならんでいます。この配置こそがすべての謎を解明する鍵なのです。実は、この材は元々掘立柱塀の柱として使われていたもので、小さな穴は間渡穴（まわたしあな）といって柱と柱の間をつなぐ横材を通すためのものなのです。地中に埋められていた部分を考慮しても、この塀は実に５ｍもの高さがあったことがわかります。この塀を取り壊す際、資材を有効活用するために、間渡穴をふさぎ、柱の中を刳り抜いて穴も塞いで木樋に転用したのです。

今夏、10年間プールで水漬けの状態にあったこの木樋を引き上げて写真撮影や実測作業をおこないました。奈良文化財研究所のスタジオは大型の遺物を撮影するために充分な広さがあります。しかし、この木樋は大人７人がかりでも少し動かすのが精一杯なほど重いため、トラックごとスタジオの中に入らなければなりませんでした。

現在、木樋は保存処理をしている最中です。皆様にご覧いただける日もそう遠くないでしょう。

（都城発掘調査部　和田 一之輔）



掘立柱塀のイメージ　この柱が木樋に転用された
（宮本長二郎1986『平城京』草思社刊　p.33に彩色）

長さ7.5mにもおよぶ木樋

研究室紹介

文化遺産部景観研究室

平成16年５月の文化財保護法が改正され、文化的景観が文化財として位置づけられるようになりました。文化的景観は、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活または生業の理解のために欠くことのできないもの」といわれます。研究所ではこれに対応するため平成18年４月に本研究室が設置されました。棚田や村落景観、製造に関わる景観、人や物の往来に関わる景観などが対象となります。

昨年度は文化庁のおこなう「採掘・製造、流通・往来および居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」に係わる業務を受託し、各自治体からのデータ約2,000件をデータベース化して整理したほか、高松塚古墳石室解体後の仮整備に関して、「特別史跡高松塚古墳仮整備基本設計業務」を受託し、整備案を作成しました。

また、昨年度に引き続き、四万十川流域の文化的景観の調査を流域の３市町から受託しています。四万十市では四万十川で行われる伝統漁法の風景、洪水時には水面下に没することがある沈下橋の景観などの現地調査をおこないました。椿原（ゆすはら）町では、お遍路さんを茶で接待するための茶堂（ちゃどう）という四阿（あずまや）風仏堂の景観調査、坂本龍馬らが脱藩するのに通ったという「脱藩の道」の現地調査、棚田オーナー制度発祥の地となった神在居（かんざいこ）の棚田の現地調査をおこなっています。上流の高岡郡四万十町でも沈下橋などの調査をおこなっています。

その他にも、古代庭園に関しては、５カ年計画で平安時代の庭園を対象に研究を進めています。

（景観研究室　内田 和伸）

佐田（四万十市）の沈下橋

太液池遺跡の遺物調査

唐長安城大明宮太液池遺跡の共同発掘調査は2005年春の調査をもって終了しました。しかし、その調査で出土した遺物は量、種類ともに豊富で整理作業は現在も進行中です。都城発掘調査部では中国と共同で出土遺物の調査研究を実施しています。

2007年3月と9月の２度にわたって研究員を現地に派遣し、遺物の調査をおこないました。瓦磚（がせん）類、陶磁器類、石製建築部材について、製作技法、加工技術を調べることを課題とし、多くの基礎資料を作成しました。

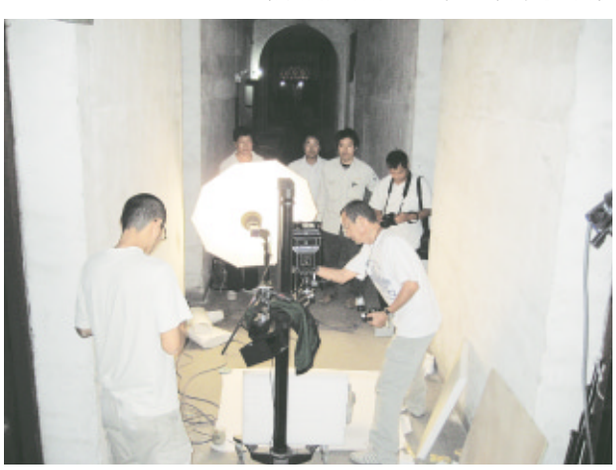
同時に、報告書に掲載するための遺物の写真撮影を実施しました。今回は双方協議の上で、日本側の撮影機材を持ち込み、すべて４×５インチサイズのフィルムで撮影しました。現地では写真撮影の方法についても中国側と相互に意見を交換し、あらたな技術交流の機会を持つことができました。

太液池遺跡から出土した遺物のなかで石製の象や獅子の彫刻、仏像、石灯籠や欄干などはひときわ目を引きます。そこで、西安碑林博物館所蔵の欄干や石灯籠についても実測と撮影をおこない、唐代の彫刻にかんする比較研究資料を作成しました。

調査の合間を縫って、陝西省考古研究所、陝西省歴史博物館、西安碑林博物館、西安博物院、西北大学文博学院などの専門家の方々とも交流を深めました。将来の研究発展のために大いに寄与するものと思います。

今後は遺跡や遺物に対する見解について中国側と意見交換し、報告書作成にむけて作業を進めていく予定です。

（都城発掘調査部　今井 晃樹）



出土遺物の撮影風景

オレゴンからの報告

2007年９月14日から22日までの９日間、米国オレゴン州の発掘に参加してきました。話の発端は、「オレゴン州のコロンビア川の河原でドングリが詰まった貯蔵穴を見つけたので、再発掘に協力して欲しい」というメールが、昨年の秋、古くからの友人であるワシントン州ピュージェットサウンド・コミュニティー・カレッジのデール・クロースさんから届いたことからでした。

日本でも、縄文時代の人々は、秋になると大量のドングリを穴の中で保存して、食物が乏しくなる冬から春先の季節に備えていました。弥生時代になっても、天候不順で米が実らない場合の救荒食料として、ドングリを蓄えていたことが、各地で発掘されるドングリピットからわかります。ただ、東日本では乾燥した丘陵上に「フラスコ状ピット」という、口がすぼまり、底が広くなる穴に貯蔵していたのに対して、西日本では地下水が湧いてくる湿地に素堀の穴を掘ってドングリを貯蔵していました。なぜ、わざわざ水漬けの状態でドングリを貯蔵したのかは、ドングリのあく抜きのためだとか、虫除けのためと言われているのですが、よくわかっていません。

太平洋を隔てた北米大陸のカリフォルニアから南アラスカにかけての先住アメリカ人（アメリカ・インディアン）も、さかんにドングリを食用としていました。その中心とも言えるオレゴン州で水漬けのドングリピットが見つかったというので、発掘に参加することを決めたのです。

ところがドングリの専門でもない私が、単身で参加してもお役に立てるとは思えず、貯蔵穴に造詣の深い山本直人さん（名古屋大学教授）や、貯蔵穴の発掘経験が豊富な宮尾亨さん（新潟県立歴史博物館学芸員）、岩崎厚志さん（前國學院大學助手）、管野智則さん（東北大学助教）らの友人を誘って参加しました。

サンケン・ビレッジ遺跡の位置

発掘はシャワーで表面の泥を洗い流すことから始まる

ロッキー山脈の西麓の水を集めて太平洋に注ぐコロンビア川は、全米でも代表的な大河の一つです。今回発掘に参加したサンケン・ビレッジ（Sunken Village）遺跡は、コロンビア川の中州、ソーベ（Sauvie）島の西岸に立地します。日本からの移民で知られるポートランド市から、北へ車で１時間ほどのところです。河口からこの島まで約70kmもあるのですが、それでも満潮時には遺跡が水没してしまいます。

ドングリピットは川の汀線と堤防の間の砂質の岸辺に数十基が分布し、シャワーの水で表面に薄く堆積した泥を流し去ると輪郭が姿を見せます。重複しているピットが多いので、毎年のようにこの場所にピットが掘られたこともわかります。ちょうどここで中州の小川が本流に合流し、地下水脈が豊富だったからなのでしょう。穴を掘って木の小枝や葉でまわりを囲って隙間をつくり、そこに編みかごに入れたドングリを埋めたという、乾燥した遺跡ではわからなかったピットの構造も、水漬けだったおかげでわかりました。こちらのドングリは、落葉性のカシ類（オーク）でアクが強く、そのままでは食用になりません。食べるときにはドングリを粉々に砕いて、水に晒す必要があります。クロース氏は今、ドングリの年代測定を依頼するとともに、研究室の水槽に貯蔵穴の模型をこしらえて水を循環させ、粒のままでドングリのあく抜きができるものか実験しています。

遺跡周辺には宿泊施設がないので、テントを設営して寝泊まりしました。今年の日本の９月は、例年にもまして残暑が厳しかったのですが、オレゴンでは夜がふけると、ズボン、フリースを身につけていても冷気が寝袋の中にまで侵入して、寒くて眠れない夜が続きました。

（埋蔵文化財センター　松井 章）

飛鳥資料館冬期企画展のご紹介

発掘調査速報展
「飛鳥の考古学　2007」
平成20年１月４日（金）～２月３日（日）

2007年は、飛鳥における発掘調査が、考古学や文化財保存にとって歴史に残る年になりそうです。それは、高松塚古墳石室の解体作業に象徴されています。８月、全国民が注目するなか、石室の解体は無事終了しましたが、これは一連の高松塚古墳壁画保存問題の一つの画期となるものでした。解体に伴う発掘調査では、壁画の劣化に結びつくさまざまな情報に加えて、墳丘を形成する細かい版築層、造成する際に用いられた莚（むしろ）や、突き棒で盛土を突いた痕跡もみつかりました。これらは、高松塚古墳を築造する際の高い技術を示すもので、考古学的にも重要な知見であります。

飛鳥の地には、歴史をめぐる、さまざまな謎が残されています。発掘調査では、こうした謎にせまる手がかりもみえてきました。蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅があったといわれる甘樫丘では東麓遺跡の調査により石垣を発見、邸宅との関係が注目されました。石神遺跡では、古代の幹線道路・山田道の南側溝とみられる溝を確認し、飛鳥における都市計画の実体解明も進められています。

飛鳥資料館では、こうした発掘の最新情報を広くご紹介するため、昨年に引き続き、明日香村教育委員会と共催で「飛鳥の考古学2007」を開催致します。調査により得られた知見や出土品を通して、飛鳥の歴史を実感していただければ幸いです。

（飛鳥資料館　西田 紀子）

解体直前の高松塚古墳石室

■　記　録

埋蔵文化財担当者研修

○地方官衙遺跡調査課程
平成19年10月１日～５日　　14名

○保存科学Ⅰ（無機質遺物）課程
平成19年10月16日～24日　　８名

○保存科学Ⅱ（有機質遺物）課程
平成19年10月25日～11月１日　８名

○報告書作成課程
平成19年11月７日～16日　　18名

公開講演会（第101回）

平成19年10月20日（土）午後１時30分～
於：平城宮跡資料館講堂
「キトラ古墳壁画の保存」
降幡　順子　　埋蔵文化財センター研究員
「文化遺産としての風景の保存」
平澤　毅　　文化遺産部主任研究員

平城宮跡資料館展示

○特別企画展「地下の正倉院展－平城宮木簡の世界－」
平成19年10月23日（火）～12月16日（日）

○公開シンポジウム「出土文字資料研究の最前線－地下の正倉院文書を読む－」
平成19年11月23日（祝・金）

○速報展「平城宮跡東院地区中枢部の調査」
平成19年11月13日（火）～12月16日（日）

飛鳥資料館秋期特別展

○展示「奇偉荘厳　山田寺」
平成19年10月19日（金）～11月25日（日）

○特別講演会
平成19年10月28日（日）
「山田寺の発掘調査と重要文化財指定」
土肥　孝　　文化庁主任調査官
平成19年11月３日（土）
「山田寺の建築を再考する」
鈴木　嘉吉　　元奈良国立文化財研究所長

■　最近の本―所員の編著から―

○小野正敏・佐藤信・舘野和己・田辺征夫／編
『歴史考古学大辞典』
吉川弘文館、2007年３月

○村上　隆著『金・銀・銅の日本史』
（岩波新書）岩波書店、2007年７月

○玉田芳英著『日本の美術498　縄文土器 後期』
至文堂、2007年10月

編集「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.jp/
Eメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2007年12月